

石刃鎌文化について

梶 原 洋

I

石刃鎌文化は昭和18年齊藤米太郎により発表された当初から「異質文化」として、大陸との密接な関連が注目されて来た。氏は櫛目紋土器を持つ大陸文化の流れを汲むものであろうとしたし(齊藤1943)、吉崎昌一は周辺文化として把え(吉崎1956)、芹沢長介はシベリア中石器時代ヒン期との関連を考えたり(芹沢1960)というように、漠然とした原郷土推測という域を出ないものであった。

その後の研究の進展につれて、新たにシベリア編年の新石器時代にあたる、セロボ・キトイ期との対比・テチュヘ下層土器と女満別押型文との文様が類似しているとの指摘、留辺蘿町紅葉山遺跡の発掘結果から、ウスチベラヤ遺跡の中石器時代文化との関連についてなど様々な見解が示されてきた。(加藤1963、佐藤1964、藤本1965)

近年、アムール川流域において、新石器時代初期に属するとされるノボペトロフカ文化の詳細が明らかになり、北海道の石刃鎌文化と極めて似通

った遺物組成を持つ文化であることがわかった。

(A.π、デレビヤンコ1970) それ以降、集落構造やエコシステムなどを含めたより広い意味での大陸との比較検討が中心的な課題となつて來た。そこで、次にユーラシア大陸各地の石刃鎌(石刃を素材として作出された鎌)を持つ遺跡の概要を述べ、その後に北海道の石刃鎌文化について述べてみたい。

II

北欧・スカンジナビア半島の新石器時代・ヨンダンでも中石器時代((B. P. 8000)には存在する。ヨーロッパロシアのボルガ川・オカ川流域の中石器時代、クリミアケルト半島の中石器時代、中央アジアイシム川上流域の中石器時代・新石器時代からも発見されている。シベリアエニセイ川下流域のタイミル半島の中石器時代から新石器時代にかけて多くの遺跡があり、直線的な基部を持つ石刃鎌を伴う。これらの遺跡群はレナ川流域のベリカチ遺跡との関連が考えられている。このベリカチ

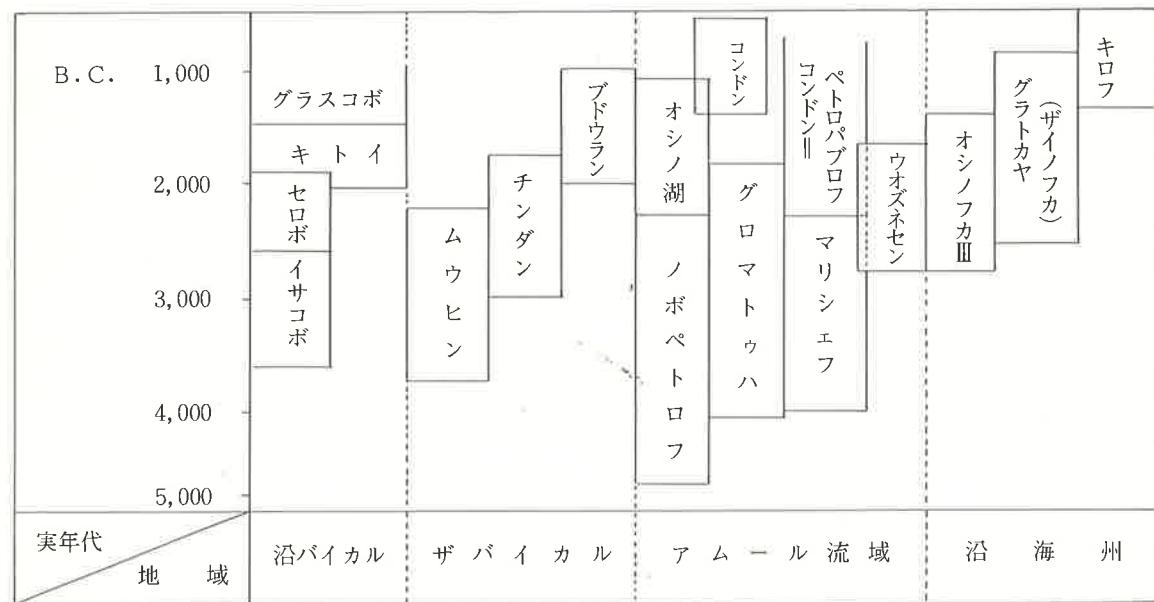


Table 1 シベリア新石器文化の編年 (Okladnikov, 1970に加筆)

遺跡は多層遺跡であり、モチャノフにより中石器時代（沖積世旧石器時代）～後期新石器時代まで4つの区分がなされている。この中で石刃鎌が伴うのは、前期新石器時代（スィアラフ文化）である。沿バイカル地域には以前から日本の石刃鎌文化と関係があるとされてきた遺跡がある。特にアンガラ川上流のウスチベラヤ遺跡のコンプレックスは紅葉山遺跡との関連から石刃鎌の渡来時期について大きな問題を投げかけている。アムール川中流域にはノボペトロフカ遺跡、コンスタンチノフカ遺跡がある。11軒の住居址と多くのピットが発見されていて集落址と考えられている。石刃鎌は柳葉形・両側に抉りのあるもの・基部にあまり加工のないものである。土器はいわゆる刻みのある隆帯文を持つもの・無文・豆粒文などで平底と考えられている。ゼヤ川支流域にはグロマトゥハ文化の遺跡がある。この文化に特徴的な事は石刃技法とともに礫器技法が隆盛していることである。石刃鎌とともに打製石斧状のもの、エンド・スクレイバー（フレーク製）、扁桃形や半月形？の石槍などがある。土器は草あるいは粗雑な織物を巻いた施文具で加えた文様、菱形・長方形・円形の押形圧痕文よりなる文様、櫛目列点文、刻目のある貼付隆線文、横沈線よりなる各種の文様の組み合せを持ち平底である。沿海州から樺太にかけてはまだ良好な遺跡は報告されていないがプフスン遺跡・コンドン遺跡などがある。中国東北部には戦前から注目を集めている昂々渓遺跡（俄羅斯貝塚）がある。土器は水平に走る細隆起線文で飾られ、刻み目の入ったものもある。

III

ユーラシア大陸全域に広がっている石刃を素材にして鎌を作るという技術伝統は、ある時期のある文化で一元的に発明されたものではなく、石刃技法を持つ多くの文化の中で個別に作られたものであろう。氷河の後退に伴ってそれまで人類の侵入を拒んできた地域に向って移住が行われただろうし、各文化の間での接触や、獲物を求めての移動も頻繁に起ったではあろうが、後氷期の生態系の変化に適応した形で弓矢が発明されたとすれば、多元的な発生・発展が最も妥当であろう。例えばボルガ、オカ川流域では、中石器時代に有茎（柳葉形）の石刃鎌が現れて新石器時代にもその伝統

は残る。ウラルから中央アジアにかけては、片狭・平基の石刃鎌がその主流をなしているようだし、バイカル以東では種々の形があるものの柳葉形か平基の石刃鎌が主体的である。バイカル周辺でもヒン遺跡、チャスチエ遺跡では片狭のものもあるが、これは前に加藤晋平が指摘したように、より西方の中央アジア方面との交流を示すものであろう。（加藤1968）この地域で最も古いと考えられる石刃鎌は、いわゆるウスチベラヤ遺跡、チエレムシュニク遺跡の（細）石刃鎌である。両遺跡ともほぼB.P.10000年前後と考えられている。しかし、メドベーデフによれば石刃鎌が発見された層よりも下層から石鎌と考えられる石刃製両面加工尖頭器が見つけられているということで、最初の鎌は石刃鎌ではないということになる。しかし、ヒン遺跡でも類似の尖頭器（石鎌）が見つかっており、この地域では石刃鎌には当初から両面加工の尖頭器（石鎌）が伴うのかもしれない。ウスチベラヤ遺跡の石刃鎌を伴う石器群は加藤晋平により留辺蘿町紅葉山遺跡の石器群と対比され、石刃鎌文化の渡来時期についての説の一つの重要な裏付けとなっている。（加藤1969）紅葉山遺跡の石刃鎌はあながち混入とは考えられないものの同時期と考えられる北海道内の他の遺跡で一点も発見されないことから、まだ不明としなくてはならないと考える。北海道の石刃鎌文化は本来土器を伴って渡来したと考えることが、現在では最も適切であると思われる。

ヤクーチャのベリカチI遺跡は注目すべき多層遺跡である。特に驚きに値するのは、土器の文様が縄文時代のものに酷似することである。なかでも絡条体圧痕文は浦幌式に酷似しているが、残念ながらこの「撫糸文複合」と言われる土器群は中期新石器時代（ベリカチ文化）であり石刃鎌は伴わない。前期新石器時代（石刃鎌を伴う）の土器はイサコボ的な網目である。これに伴う石器群の組成は後述するグロマトゥハ文化との関連を想起させる。中村嘉男が言うように、このベリカチI遺跡の土器を伴う文化は日本と直接的な関連は持たずに独自の発展を遂げたものであろう。（中村1970）

現在アムール川中流域で土器を伴う最古の文化とされている（B.P.7000年頃）ノボペトロフカ文化は、北海道の石刃鎌文化に最も近いと考えられ

ている。しかし、詳細に見るとその内容にはかなり違いがあるようだ。石核としてあげられているものの中には、いわゆるゴビ形細石核といわれるものや、エピ・ルバロワ形などと呼ばれているものもあり、日本の石刃鎌文化の石核に比べてかなり多様である。石刃鎌の形態にしても裏面を上・下とも調整して柳葉形に仕上げたものなどは北海道の石刃鎌文化には見られないものである。磨製石斧も図で見た限りでは擦切手法で作られたものではないようである。とりわけ最も違うのは土器の文様である。北海道の石刃鎌文化に伴うと考えられている土器の文様は、縦条体圧痕文、菱形や矩形の女満別押型文（大場・奥田1960）、類竹管文（駒井1963）、無文などであるが、ノボペトロフカ文化の土器の文様は刻み目のある隆帯の間に鋸歯状に入るるものである。もっとも、この文様が縄の模倣であるとするならば、このような文様構成は浦幌式の縦条体圧痕文土器に見られるものである。また、無文の土器の器形に関して、木村英明はトコロ14類土器との類似を指摘している。（木村1967）違いだけをあげるようであるが、もちろん類似点は多いのである。シングル・ブロー・タイプの彫器が多い事、小形のエンド・スクレイパー（石刃製）、刃部を斜めに作出したスクレイパー、石刃製の錐の存在などがあげられ、石器組成を比較してもその類似は明かである。また、住居址に関する事、その外形が隅丸方形であることは、ノボペトロフカ、共栄B遺跡（後藤・大槻1976）、朝日トコロ貝塚（駒井1963）、湧別遺跡で共通する点である。このようにノボペトロフカ文化は北海道の石刃鎌文化にかなり近い文化と見られるが、相違点がある事を指摘して、次に同じくアムール川中流の石刃鎌を伴う文化、グロマトゥハ文化との関連を述べてみたい。

この文化は、またその詳細が明らかではないものの、デュレピヤンコやオクラドニコフによれば、石刃文化としてのノボペトロフカ文化に対して礫石器文化の特徴を持つものであるという。そしてノボペトロフカ遺跡に、グロマトゥハ文化はオシボクカ遺跡に最も近いとされている。剝片より作られた石器と石刃技法の石器との共存という特徴は日本で問題になった石器組成の違いということに若干の示唆を与えるものではないか。つまり、女満別遺跡の両面加工の尖頭器や剝片で作られた

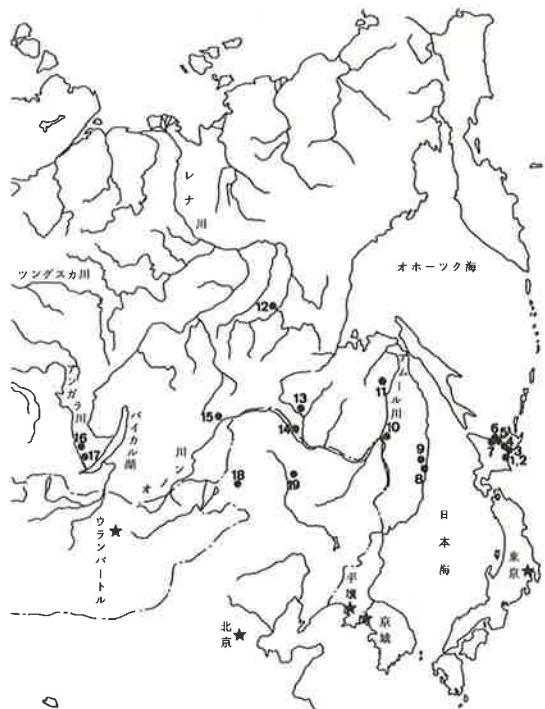


Fig. 1 石刃鎌文化関係遺跡地図

- 1：浦幌新吉野台遺跡 2：共栄B遺跡 3：東釧路遺跡第Ⅱ地点 4：標茶二ツ山遺跡 5：女満別豊里遺跡 6：朝日トコロ貝塚 7：湧別市川遺跡 8：ウスチノスカ遺跡 9：テチュヘ遺跡 10：オシボクカ遺跡 11：コンドン遺跡 12：ベリカチI遺跡 13：グロマトゥハ遺跡 14：ノボペトロフカ遺跡 15：シルカ洞窟 16：ヒン墳墓 17：チャスチエ遺跡 18：ハイラル遺跡 19：昂々溪遺跡

搔器と石刃技法の共存という石器組成は、グロマトゥハ文化により近いものを感じさせるのである。また、石刃鎌文化によく見られる打製の大形石斧もこれに関連があるのである。さらに、土器の文様としてあげられている中に、「草或は粗雑な織物を巻いた施文具で加えた文様と、土器を帶状に巻きながら列状に並らぶ各種の菱形・長方形・円形の押型圧痕よりなる文様」と「歯状の動く小輪で加えた櫛目列点文・刻目のある貼付隆線文・横沈線より成る各種の組み合わせ」という説明がある。特に図には縦条体圧痕文？、菱形押型文などが示されており、単なる類似以上の関連を考えられるのである。中村嘉男によれば、「ノボペトロフカ文化の貼付隆線文の次に、グロマトゥ

ハ文化の窓文や橢円瓜形（押型？）」が来るという。
 （中村他1975）このグロマトゥハ文化には、土器の文様で見る限り北海道の石刃鍛文化に現われる全ての文様を既に有していたと考えられるのである。北海道において女満別押型文は絡条体圧痕文と別個に出土する場合が多いけれども標茶町ニツ山遺跡などでは伴って出土している。（沢1968a）もちろん、グロマトゥハ文化と北海道の石刃鍛文化には違いもある。例えば、楔形石核（ゴビ形石核）が伴うこと、片面加工の石器があることである。石核に関してはノボペトロフカ文化でも同じである。デュレピヤンコはグロマトゥハ文化を説明した中でオシポフカ文化の諸部族がアムール川中流域でノボペトロフカ文化がその子孫のオシノボエ湖文化の諸部族と接触したとしている。（A・P・デュレピヤンコ1970）また、その分布領域は広大であり、移動的生活様式を持っていたと述べている。その影響下にある地域として、アムール上流・ザバイカル（シルカ洞窟など）、さらには中国東北部（昂々溪）・モンゴル（ハイラル）等をあげている。また、その推定年代をノボペトロフカ文化は前5000年期中～前4000年期初めとすることから、前4000年期～前3000年期初めとしている。

IV

現在までに発見された北海道の石刃鍛文化の遺跡は東北部に限られている。このことに関しては、既に生態系の違いという説があるが、目下のところ最も妥当と言えるであろう。同一の生態系と考えられるアムール川中流域には、前述のように、ノボペトロフカ文化やグロマトゥハ文化がある。

次に、発掘された石刃鍛文化の遺跡と比較しながら論を進めてみたい。

まず、土器の文様について見てみると朝日トコ貝塚では絡条体圧痕文の施文されるものと円形文の施文されるもの（駒井1963）、湧別市川遺跡では絡条体圧痕文（木村1973）、女満別豊里遺跡では菱形押型文・格子目文（矩形押型文）、櫛目状の文様（大場・奥田1960）、標茶町ニツ山遺跡では絡条体圧痕文・菱形押型文（沢1968a）、東釧路遺跡第Ⅱ地点では絡条体圧痕文・刺突文（沢1968b）、浦幌新吉野台遺跡では絡条体圧痕文など（後藤・佐藤1975）である。

また、石器に関しては女満別豊里遺跡では既に指摘されているように、剝片から作られたスクレイパー・石槍などが顕著である。湧別市川遺跡・共栄B遺跡などでは彫器が極めて多い。かって、朝日トコ貝塚の報告者は、この差異をして2つの階梯があることを示すのかもしれないとした。

（駒井1963）もちろんこのような土器文様の差異や石器組成の差異は時期の違いとしてではなく、生態系に対する適応の違いなどとも考えられる。

先にグロマトゥハ文化について述べた際、土器群の文様として「草或は粗雑な織物を巻いた施文具で加えた文様」（絡条体圧痕文か或いは単なる叩きかもしれない）と「土器を帯状に巻きながら列状に並ぶ各種の菱形、長方形、円形の押型圧痕より成る文様」、「櫛目列点文、貼付隆線文、横沈線より成る各種の組み合わせ」をあげた。これらの中で刻み目のある貼付隆線文・横沈線の組み合わせを除いては、北海道の石刃鍛文化に全て存在するものである。また、この文化の石器群と女満別豊里遺跡の石器群との類似を考えた。今、グロマトゥハ文化の扱い手が土器を持って北海道に渡来したとすれば、その本来の土器群は前記したすべての土器の文様を持っていたであろう。そして、おそらくそのような土器の文様は石刃鍛文化が変容していく過程の中で消えて行き、最後には縄を使用する絡条体圧痕文がその主流として残ったのではなかろうか。石器群も元来フレークツールを多く持っていたものが全て石刃技法に統一されていったのではなかろうか。きわめて雑然とした論ではあるが石刃鍛文化の中の土器文様の違い石器組成の違い、土器出土量の多少は変容の過程をある程度示していると考える。あえて段階に分けるとするならば、女満別豊里遺跡が最も古く、標茶ニツ山遺跡・朝日トコ貝塚が中間的なものであり、湧別市川遺跡・浦幌新吉野台遺跡・共栄B遺跡が新しいと考えられる。

道東の縄文早期の編年の中で石刃鍛文化がどこに属するかという問題に対し、沢四郎を中心とする早期後半の2型式ほどの短い期間とする考え方（沢1969）と、木村英明の早期の初めからその後半までの長い期間とする考え方（木村1967）と二つあるが、石刃鍛文化が土器文様として縄を使うことを持ち込んだと考えられ、縄を使う土器群とそれ以前のものとをはっきり区別されるべきであ

り、石刃鎌文化に伴うとされるテンネル式（沢1964）や浦幌式などが縄を文様とする土器群の最前列に置かれるとするならば、今までの所では沢の編年がより合理的であろうと思われる。

石刃鎌があたかも突然に出現し、潮の引くようにな消え去ったかのごとくなのは気候等の自然条件が大きく作用しているのではないだろうか。消滅の過程についてはまだ何とも言い難いが、縄を土器文様として使用する事が痕跡として残り、田原式石鎌なども石刃鎌の技術伝統をひくものかもしれない。

V

かなり乱雑な文章で雑然とした論を述べてきたが、石刃鎌文化の研究においても、基本的な遺物と遺構の関係を確実に把握することが最も大切であることを痛感した。

これから石刃鎌文化の研究の課題は、おそらく次の4点であろう。

- ① 編年の位置付けを確実にすること。（道東の縄文早期土器群についてのより厳密な究明）
- ② 集落址などの発掘を通じて、文化の全体的な姿を明らかにしていくこと。
- ③ 石刃鎌文化の中の変容と消滅の過程をより具体的にしていくこと。
- ④ 大陸文化との対比と伝播経路とをより明確にすること。

末筆ではあるがご指導いただいた方に深く感謝したいと思う。

東北大学教授芹沢長介先生・北海道大学助教授吉崎昌一先生・釧路市立郷土博物館沢四郎先生・西幸隆先生、発掘参加や資料使用について便宜を図って下さった上に拙文の投稿を進めて下さった石橋次雄先生・大槻日出男先生・後藤秀彦氏・河村七五三喜氏にお礼申し上げる。

(東北大学文学部研究生)

引用文献

- A・π・デエレビヤンコ (1970) アムール中流域のノボペトロフカ文化
 大場利夫・奥田寛 (1960) 女満別遺跡
 加藤晋平 (1963) 石刃鎌について、物質文化1
 —— (1966) 東シベリア極東に於ける弓矢の発生、北海道考古学4

- (1969) 極東に於ける土器の起源（石刃鎌を手がかりにして）、歴史教育17-4
 木村英明 (1967) 北海道先土器時代終焉に関する一理解、古代文化19-2
 —— (1973) 湧別市川遺跡
 後藤秀彦・佐藤訓敏 (1975) 浦幌新吉野台細石器遺跡出土の遺物、浦幌町郷土博物館報告6
 ——・大槻日出男 (1976) 共栄B遺跡——北海道浦幌町共栄B遺跡発掘調査報告書
 駒井和愛 (1963) オホツク海沿岸・知床半島の遺跡 上
 斎藤米太郎 (1943) 櫛目紋尖底土器を随伴する細石器遺跡、考古学雑誌33-7
 佐藤達夫 (1964) 女満別式土器について、Museum 157
 沢 四郎 (1964) 北海道釧路村テンネル第1地点出土の土器について、釧路の古代文化6
 —— (1968 a) 釧路地方に於ける石刃鎌の編年的位置——伴出土器を中心にして——、新釧路市史会報2-3
 —— (1968 b) 釧路市東釧路遺跡第II地点発掘調査概要
 —— (1969) 道東における早期縄文土器の編年について、釧路史学1
 芹沢長介 (1960) 石器時代の日本
 中村嘉男 (1970) アルダンの前期新石器時代、考古学研究16-5
 ——・他 (1975) シベリア・極東の考古学I
 藤本 強 (1965) 北海道常呂郡留辺蘿町紅葉山遺跡発掘調査報告、考古学雑誌50-2
 吉崎昌一 (1956) 日本に於けるBlade industry, 西郊文化14

1976年6月1日 印刷

1976年6月1日 発行

編集 後藤秀彦

発行責任者 家村克行

発行所 浦幌町郷土博物館

北海道十勝郡浦幌町字東山町23番地

印刷所 大同出版紙業株式会社

北海道帯広市西7条南6丁目